静　岡　県　　平成26年3月15日

読書活動だより.64

編集・発行　静岡県読書推進運動協議会

静岡市駿河区谷田53－1
静岡県立中央図書館内
TEL　054-262-1246

「読書三到」に寄せて

静岡県読書推進運動協議会会長
鈴　木　雄　介

南宋の朱子(1130～1200)が、主張した読書の三条件

口到＝声に出して本をよく読む。

眼到＝目を本に集中させる。

心到＝心を本に集中させる。

江戸時代の寺子屋ではこれが徹底された。

有名な言葉「少年易老学難成 一寸光陰不可軽 未覚池塘春草夢 階前梧葉己秋聲」という「偶成」詩は朱子の作とされ、ことわざとして用いられているが、詩文集にこの詩はなく、近年は日本人の作だとする説が有力になっている。

口到＝声に出して読むことにより、文章の中味が眼に浮ぶし、自分の想像力を働かせ、内容を理解し、文字をたどっていくことにより物語を楽しむことができる。

現在でも家庭学習の一つとして国語の教科書を音読し、親がそれを聞いて間違いなく読めたかをカードに記入する。外国でもリーディングとして幼児に音読をさせている。音読の効果は洋の東西を問わず、文章を正しく読めたかが求められる。

眼到＝目で文章を追い、じっくりと読む。私たちはその作品から、さまざまな生き方を知り、世界にはいろいろな人がいて、その場所での生活を知ることができる。また、作者の伝えたいことや思いを考えることができ、自分の考えと対比し、判断力を養うことができる。

心到＝心が集中していなければ眼もおろそかになり、音読しても覚えられない。心が集中していさえすれば、眼も口もついていくと説く。心が集中する読書とは、座右の書、愛読書ではないだろうか。私の愛読書は『三国志』である。学生のころは、夏休みになると読んでいた。十代から今日まで何度となく読んでいた『三国志』は、その年代によって受ける感動が異なり、自分自身を高めることができた。心を集中させるということは本を読むことに無我夢中になることだと思う。夢中になれる本を求めていくことが、読書を楽しむことだと考えられる。

《内容紹介（もくじ）》

◎巻頭言
(静岡県読書推進運動協議会会長　鈴木　雄介)……1
◎静岡県図書館大会･読書活動分科会報告 ……2
◎平成25年度　優良読書グループ紹介
★(公社)読書推進運動協議会長賞(全国表彰)
チリンの会(富士市)……2
★静岡県読書推進運動協議会長賞(県表彰)
読み聞かせ実行委員会……3
おはなしの会　おひさま……3
おとぎのへや……3
ねこバス……3
水ようおはなし会……3
点訳サークル　六つの星……3
◎静岡県読書推進運動協議会講演会報告……4
◎静岡県読み聞かせネットワーク全体講演会報告…4
◎推薦図書……4

静岡県図書館大会・読書活動分科会報告

平成25年10月28日(月)にグランシップを会場にして、第21回図書館大会が行われました。

今回は「読書県しずおか」の提唱者であり、県内の読書活動を牽引されてきた静岡文化芸術大学理事、鈴木善彦さんに21世紀を生きるこどもと若者、おとなに向け、なぜ人は本を読むのかその原点を探り、改めて考える機会を提供していただきました。

鈴木さんは、様々な不安を抱え、将来もまた希望に満ちているとは言えない今、子どもたちに希望をつくるには大丈夫という言葉が大事であること、その大丈夫をもたらしてくれるのが本。「1冊の本は風を起こし、こどもの心に今まで知らなかった景色、考え方、世界を届けてくれる。本との出会いの中でこどもたちは、この世は生きるに値すると思うだろう。それが正に希望。」と話され、こどもには、本から優しさ、賢さ、楽しさを得て欲しいと話されました。また、大学生の読書調査をしたところ、「こどもの頃読んだ1冊の本が、学生の心にしっかりと根付き、そこから想像力、価値観、道徳観を獲得し自分の成長につなげていることが分かった。小さい時読んだ本は、IT時代を生きる若者の心の中に脈々と流れている。」と、実践資料をもとに話され、参加者は改めて本のもつ力を感じました。

「豊かさと不確実さが同居している今の世の中、知恵をつけることが大切。21世紀こそ文化や英知を大切にする時代であってほしい。そのために本を読むことが必要。図書館は、無限の可能性をもっている。様々に交流するのが図書館。それを活かしてほしい。」と、県内の図書館のすばらしさも話してくださいました。最後に話された、「本というのは、読者が手にした時からその人の本になる。もっと言えば読者が作者になるのです。」と言われた言葉が印象に残りました。

平成25年度　優良読書グループ紹介

(公社)読書推進運動協議会長表彰(全国表彰)

【チリンの会(富士市)】

本会は、公立幼稚園教諭の呼び掛けにより、卒園児の母親有志グループとして、平成元年４月に発足しました。『チリンの会』の名は、初めて制作した大型紙芝居『チリンのすず』(やなせたかし作・絵 フレーベル館)より名付け、「子どもたちに絵本の楽しさを伝え、本に親しんでもらいたい。」という願いをもとに、初めの一歩をスタートさせてから、今年で25年目を迎えました。活動は、毎週金曜日の朝に行う小学校全クラス一斉読み聞かせ(年36回)や、昼休みのお話の会「おはなしメルヘン」(年６回)、読書月間に学年ごとのお話の会「わくわくメルヘン」(年１回)を始めとして、地域の幼稚園や保育園で行うお楽しみ会(年14回)、読み聞かせをしている人向けの「読み聞かせ勉強会」(年９回)、まちづくりセンターにおいて「おはなしクリスマス会」(通算21回)等、多岐に渡ります。また、親子で絵本から読み物への関心を持ち、読書への橋渡しをする目的で広報「おはなしのとびら」(年４回)、ミニ冊子「チリンのおすすめ本」の制作配布をしています。現在メンバーは25名、本年１月には、小学校の読み聞かせは630回、「おはなしメルヘン」は116回を迎えました。おはなしを一期一会の気持ちで届けようと、練習会、反省会を実施、資質や意欲の向上に努め、その楽しさを伝えようと、メンバー一人一人の個性と力を合わせています。このように、小さな一歩を地道に続けている本会は、誠実さとチームワークの良さを持ち合わせているのが自慢です。

(代表　吉野　了子)

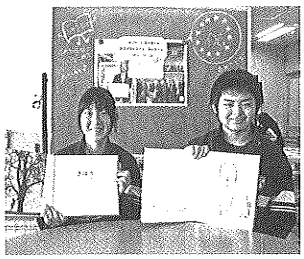
静岡県読書推進運動協議会長表彰(県表彰)

【読み聞かせ実行委員会(熱海市)】

私達は、熱海中学校の隣にある桃山小学校に行き、絵本の読み聞かせをしています。今年度は6回実施し、多くの人に参加してもらうために、回ごとに違う生徒になるように計画して行いました。

読み聞かせが始まった当初は緊張もあり、本を読む声は小さく、ぼそぼそとした読み方になってしまう人がほとんどでした。しかし、回を重ねるごとに登場人物によって声色を変えたり、場面ごとに表情をつけたり、工夫して読むようになりました。小学生も毎回楽しみにしてくれているようです。

この活動を通して、読み聞かせに参加した生徒も小学生も、読書に対して興味をもってもらえたと感じています。



今後も読書の輪を広げることと小中学生の架け橋となることを目標に、活動を進めていきます。

(平成25年度実行委員長:
髙橋春菜)

【おはなしの会 おひさま(富士市)】

平成10年、小学校の校長先生からお話をいただき、読み聞かせを通して豊かな本の世界を子どもたちに伝え　本に親しむことができるようにと9人で会を立ち上げました。

最初は1・2年生から始めました。講習会に参加したり、多くの方々からアドバイスを頂いたりしながら、皆で勉強し、平成14年には全学年で実施できるようになりました。また、中学校での読み聞かせも始まりました。同時にブックスタート支援事業としてのおはなし会「おひさま」をスタート。わらべ歌や絵本を通して子どもとの時間を楽しく心豊かに!と願い、月1回行っています。

現在、会員21名。児童施設での読み聞かせ、クリスマス会、小学校での紙芝居、地域の様々な催し物にと活動の場が広がっています。

この表彰の重みをエネルギーにして、これから活動を続けていきたいと思います。

(代表　芝田敏子)

【おとぎのへや(富士宮市)】

富士宮市立富士根南小学校で、絵本の読み聞かせと語りを行っています。1、2年生への読み聞かせでは、年度初めに各月の課題本を決め、1冊は全クラス共通の絵本を読んでいます。すべての児童に基本的な絵本と出会って欲しいからです。3年生以上の全学級と支援学級にも、読み聞かせと語りを行っています。本選びで特に参考にしている本は、富士宮市の読書推進サポーターが発行したリスト「おもしろい本み～つけた」です。富士宮市や図書館主催の講座や講演会にも積極的に参加し、「おとぎのへや」独自の勉強会やお話会も設けています。子ども達に、より骨太で素晴らしい作品を届けるためには、まず私達が質の良い多くの絵本と出会い、楽しむことだと信じています。またメンバー同士の交流も大切だと感じているので、積極的にコミュニケーションをとるよう心がけています。

(代表　森川めぐみ)

【ねこバス(静岡市)】

「ねこバス」は平成11年に結成し、図書館サービスを受け難い環境にあった地域の子どもたちに本の楽しさ、図書館の魅力を伝えたいと思い、走り始めました。地域の小学校をはじめ、幼稚園、家庭文庫等へ「おはなしの出前」をするようになって15年目になります。メンバーも10人に増えました。そして、待望の図書館が身近にでき、そこでも毎月おはなし会をしています。絵本、パネルシアター、紙芝居等を通して子どもたちとふれあい、同じ時間を共有する。そんな至福の時を味わっています。これからも、微力ながら「子どもたちと本をつなぐ」活動が続けられたら良いなと思います。

(代表　望月さとみ)

【水ようおはなし会(菊川市)】

菊川町立図書館「菊川文庫」(現菊川市立)の開館を機に、「水ようおはなし会」として発足し、今年で28年目となりました。毎週の「おはなし会」を軸に「絵本のすばらしさを子ども達に!」と楽しく活動しています。

活動は図書館にとどまらず児童館、幼稚園、保育園、高齢者団体、施設等に出向き「出張おはなし会」を実施し、さらに人形劇の公演や「手づくり絵本講座」「子どもの本の勉強会」の企画運営や家庭文庫(やなぎ文庫)と連携し、地域への情報発信・コミュニティの発信に努める等と活動の場を広げています。

会員も増減はあるものの絶えず10人程度は維持し、年代も30代から60代までと幅広く、例会に参加していた子どもが母親になり、そして会員となりと2世代に渡ってきています。うれしいことです。

今後も「子育て中の大人が『ちょっと家でも絵本を読んでみよう』と思ってもらえるような存在でありたい。」と意を新たにしました。　(代表　三浦　康子)

【点訳サークル 六つの星(掛川市)】

掛川社協主催ボランティア講座の一つ「点字講習会」終了者達がS59年からサークル活動を始めました。当時、視覚に障害があるご両親が園児・小学生を育てていました。毎日のように子供たちが持って帰る通知をその日のうちに点訳して届けたり、子供が使っている教科書・絵本など点訳しました。親御さんからは普通の親の役目を果たせますと、感謝されたことがグループの活力になり、今につながっています。それから10年後くらいからパソコン点訳をはじめ、県内での点訳・音訳をネットワーク化し、一挙にニーズが増えました。そのため毎年点訳者養成講座を開き奔走しました。最近は視覚障害者の図書環境もパソコンや携帯電話を使うことが激増していますので、点訳ニーズは少なくなっていますが、必要としている方がいる限り続けていこうと思います。

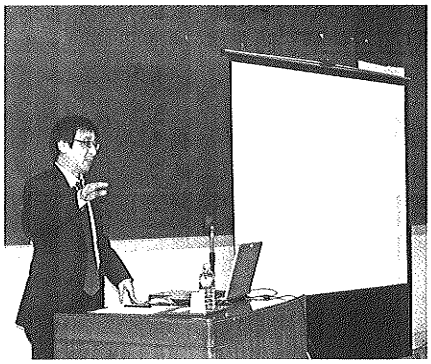
(代表　鈴木江美子)

『本屋のウラ側、お見せします!』講演会報告

平成26年２月９日(日)、静岡県立中央図書館において、さわや書店フェザン店の店長、田口幹人氏による講演会が行われました。田口氏が店長を勤める同店は盛岡駅内ビルに位置し、ＰＯＰによる販売促進などで全国でも注目集める本屋さんです。

講演では大規模書店が近隣に複数あるからこそできる品揃えをしていること、郷土関係や時事関連の棚作りを大切にしていることなどの話がありました。「お客様に『買いに来た本はなかったのに、なぜか帰りに数冊買ってしまう』と言われる」という言葉に、ここでしかできない"出会い"が同店の魅力であると感じました。後半は東日本大震災に関わるエピソードを中心に、閉店を余儀なくされた震災直後、同店のTwitter(ツイッター)で、ガソリンが手に入るスタンドの場所や信号機が消えていないかなど、盛岡の情報を発信しつづけた事、震災５日後に開店した際は、娯楽を求めて来店するお客様が多く、ここ数年で一番の売上であったことや、安否が数日間不明だった店員の両親の無事が分かった時に店内から沸き起こった拍手のことなど、様々な話をされました。

「町のために汗を掻くほど、この街に溶け込むことができる」と熱く語る田口氏に、参加者からも「書店員の熱意を知り、書店に行きたくなった」などの声が寄せられました。



静岡県 読み聞かせネットワーク 全体講演会報告

演題：「子どもの科学の本が拓く世界」
日時：平成25年11月９日(土)
　　13時30分～15時30分
講師：池上理恵氏(静岡自然を学ぶ会代表)
参加者：61人

池上先生のご講演でとても印象に残ったことは、子どもの好奇心を大切にして共に実践しながら科学の世界に引き込まれる優しさでした。

また、子どもにとっての科学の本とは想像して楽しんだり、比べて視点を知ったり、未知の世界に足を踏み入れる時に手をつないでくれたり、興味を持たせてくれたり、大人と共有できたり、いろいろな概念を育んでくれるものであるとの貴重なお話でした。

静岡県読書推進運動協議会推薦図書

★☆★シニア世代向け★☆★

『海賊とよばれた男』(上)(下)
百田尚樹／著(講談社　2012.7)

『老いてこそ遊べ』
遠藤周作／著(河出書房新社　2013.3)

『鳥と雲と薬草袋』
梨木香歩／著(新潮社　2013.3)

『隅っこの四季』
出久根達郎(岩波書店　2013.2)

『自分を愛する力』
乙武洋匡／著(講談社　2012.3)

『禅が教えてくれる美しい時間をつくる『所作』の智慧』
桝野俊明／著(幻冬舎　2013.5)

★☆★ヤング世代向け★☆★

『兵士は起つ～自衛隊史上最大の作戦』
杉山隆男／著(新潮社　2013.2)

『野心のすすめ』
林真理子／著(講談社　2013.4)

『何者』
朝井リョウ／著(新潮社　2012.11)

『今やる人になる40の習慣』
林　修／著(宝島社　2013.4)

『だからこそ僕は走り続ける』
永井　恒(静岡新聞社　2013.6)

『これからどうする:未来のつくり方』
岩波書店編集部／編(岩波書店　2013.6)